

平成26年度 海外臨床薬学研修報告書

「サンフォード大学海外臨床薬学研修を終えて」

研修期間：平成26年7月9日～7月20日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6年

090973129

榊原 崇

私は平成 26 年 7 月 9 日から 7 月 20 日まで、アメリカのアラバマ州にあるサンフォード大学および関連医療施設の臨床研修を行った。私は各 2.5 ヶ月間の薬局実習・病院実習を終え、その後の藤田保健衛生大学病院精神科外来での特別臨床研修（アドバンスト研修）を経験し、今後の日本の薬剤師の業務や役割を考える機会があった。日本の薬剤師の病棟業務、外来での研修を行い、私はより改善すべき点があると感じることがあった。しかし、具体的にどのような改善をすべきか悩んでいた。そのようなときに、この特別臨床研修はアメリカの教育システムを参考にしていることを知り、アメリカの薬学教育や臨床での薬剤師の役割はどのようになっているのか、日本とアメリカの薬剤師にはどのような違いがあるのか興味を持ち、実際にこの目で確認し、今後の日本の薬剤師に必要なことを考えるために今回の海外臨床薬学研修に参加した。

今回の研修内容では、私たちは 4 グループに分かれて関連医療施設の見学へ行った。関連医療施設の見学ができない日はサンフォード大学の先生方による講義や現在研修中のアメリカの薬学生によるケースディスカッションをしていただいた。見学できた関連医療施設は、病院では St. Vincent's Hospital、Children's Hospital of Alabama の 2 施設、クリニックでは Jefferson County Department of Health、Christ Health Center、Princeton Hoover の 3 施設であった。私は、Jefferson County Department of Health と Christ Health Center を見学した。どの施設も薬剤師が積極的に活動を行っており、他の医療従事者からも信頼されていた。そして、患者への関わり方も日本との違いを知ることができ、アメリカの良いところ、不足しているところを学ぶことができた。実際にアメリカの講義を受け、臨床現場を見学し、グローバルな視点から日本の薬剤師の良いところ、必要なところを知ることができたことが大きな成果だと思う。その研修のなかで特に印象的だったことを 3 つ報告する。

1 つ目はアメリカの薬学教育である。アメリカでは症例を検討する実践的な講義を行っており、臨床を意識した内容であった。アメリカでは 1 年目から臨床研修を行い、薬剤師の役割を低学年から認識し、積極的に薬学を勉強していることがわかった。また、3、4 年目では 1 年を通して、臨床研修を行い、薬剤師による患者へのケア、薬剤師の活動と責任を学んでいることを知った。講義はディスカッション形式で行っており、講義中に何回も学生にコメント・質問をする機会が与えられていた。常に考える姿勢、積極性を得ることを意識した講義形式が印象的だった。また、日本では、薬の作用機序や薬物動態を別々に勉強するが、アメリカでは疾患を理解してから、薬理、薬物動態を理解し、どのように薬物治療を行うかといった問題解決型の学習を行っていた。また、学習したことをフィードバックするようにしており、症例報告や論文にする必要性を教えていた。私たちの日本で受けた講義は、知識を身に着けるものが多く、それを結合・統合し、アウトプットするといった内容が不足していると感じた。アメリカでの薬理、薬物動態の内容は、私たちの学んだ日本の内容と差はなく、その身に着けた知識をどのように利用するかを学ぶ点で日本の薬学教育と大きな違いがあった。知識のアウトプットの仕方を学んでいることで、アメリカ

カの薬剤師は臨床現場で自信を持って発言できるのだと感じた。

2つ目はアメリカの臨床現場である。アメリカと日本の医療における大きな違いの1つとして、保険制度がある。アメリカは日本のように国民皆保険ではなく、保険すら入っていない患者もいる。そのような患者のために **Christ Health Center** では薬剤師は常に処方薬の薬価を確認し、より安価な薬剤を提供するように心がけていた。また、**Jefferson County Department of Health** では、薬剤師一人ひとりにオフィスがあり、医師の診察のように患者面談を行っていた。その面談では薬剤師がドラッグストアで販売されている OTC 薬の提案を患者へ行っていた。日本のように国民皆保険ではないため、アメリカでは保険未加入者は高額医療となってしまう、病院へ頻繁に通うことができない。そこで、薬剤師が OTC 薬の提案を行うことで、患者のセルフメディケーションの手助けをしており、患者からの期待に応える必要があることがわかった。アメリカのこのような現状を実際に見学し、日本のように気軽に病院へ行くことができることは、日本の利点だと思った。実際にアメリカの薬剤師もこの点は問題と考えており、病気が最悪の状態になってから初めて病院に来る患者もいるということだった。

3つ目は健康意識の差である。アメリカの食生活は、糖分、脂質、塩分が日本より非常に高い食事である。特にアメリカ南部はラードを使った脂質が高い料理が特徴である。そのため、生活習慣病の罹患率が高く、糖尿病患者が多かった。しかしながら、保険未加入者は病院に通うことができず、病状を悪化するという問題が起きていた。健康への意識が低く、体調が悪い時に薬を飲むといったアドヒアランスが低い患者が多くいた。そのため、**Jefferson County Department of Health** では薬剤師が外来で患者面談を行い、糖尿病についての指導を行っていた。糖尿病指導では、イラストでわかりやすく書かれた資料を用いて栄養指導や生活指導を行い、患者のアドヒアランス向上を目指した薬剤師指導を行っていた。

今回の海外研修において、アメリカの薬学教育、臨床での薬剤師の活動を学び、今後の日本の薬剤師の役割を考えることができた。よく日本の医療は海外と比べると遅れていると言われているが、実際にアメリカの医療をこの目で見て、日本の医療には日本の良さがあることがわかった。今まで学習した内容もアメリカとそれほど差はないことを知ることができた。しかし、学んだ知識をアウトプットしていく姿勢はアメリカの方が優れており、今後、日本の薬剤師は何をできるか積極的に患者や他職種へ見せていかなければならないと感じた。相手を理解し、相手から学び、自分の能力・自信を発展させ、自分の力を発揮し、信頼関係を築き、維持していくことが重要であり、常に学び続ける者でなくてはならないとファカルティの先生から教えていただいた。私はこの言葉から、なぜアメリカの薬剤師が信頼されているかよく理解できた。わからないことは調べ、質問し、自ら学んだことに自信を持って、相手の必要としていることに全力で応える人を信頼しないはずはないからだ。他職種、患者を理解し、そこから学び、自分が相手に何ができるか、何を必要とされているかを常に考えて行動できる薬剤師になりたいと思う。